

## 公益社団法人日本顕微鏡学会第56回シンポジウム開催にあたって

第56回シンポジウム 実行委員長 石政 勉  
プログラム委員長 大貫 惣明

平成 24 年 11 月 19 日(月)、20 日(火)の 2 日間、北海道大学学術交流会館(札幌市)において日本顕微鏡学会第56回シンポジウムが開催されます。

今回のシンポジウムでは、「ソフト・ハードマターの多様性を観る」を総合テーマとして顕微鏡学各分野での新技術の展開とイメージングへの応用に焦点をあてたプログラムを企画しました。

第一日目には、「高加速・低加速電子顕微鏡による多様観察」に関するシンポジウムと特別講演が行われます。特別講演では、今話題のテクニックである収差補正技術を搭載した超電顕による最新成果を末永和知先生と第102回日本学士院賞を授賞された高柳邦夫先生に紹介していただきます。二日目午前は、生物系と材料系の2会場に別れて、光学顕微鏡も含んだ高分解能観察の成果を発表していただきます。生物系では「カルシウムイメージング」また、材料系では「グリーン・ナノマテリアル」に焦点を絞ったセッションとなっています。特に、化学反応が顕微鏡で見えるかという興味深い研究が注目されます。二日目午後は、分科会企画を軸に3つのセッションが予定されています。生体構造解析分科会では「生命の構造を探る」、また分析電子顕微鏡分科会では「先端的応用」をテーマとした講演が行われます。さらに「イオン液体を利用した SEM 観察」という生物系・材料系両分野にインパクトのあるセッションも予定されています。また、一般講演として口頭発表 1 件、ポスター発表 8 件も含まれており、従来の顕微鏡学会シンポジウムからの脱皮を試みています。

1940 年代の学振 37 小委員会の活動記録にみられるように、組み立てるところから始めなければならなかった電子顕微鏡も、現在では「使う立場」と「開発・改良する立場」に分化しており、使うだけのユーザーには「最新技術がどこに向かっているのか」判りにくくなっています。また、それらの最新装置は大変に高額となり、一般の顕微鏡ユーザーと「持てる研究者」とのギャップも生じています。これからの顕微鏡学、さらには顕微鏡学会の発展を考えるうえで、これらの問題は無視できないものと思われます。今回の顕微鏡学会シンポジウムで行なわれる成果発表や活発な議論を通して、これらの問題解決の糸口が得られればと願っています。

11 月は北海道が厳しい冬を迎える季節です。場合によっては天候も不安定になりますが、一方、この季節ならではの「おいしいもの」がそろそろ時期でもあります。皆様の積極的なご参加を心よりお待ちしております。